

夏の風物詩の一つに鵜飼いがあります。

愛知県犬山市の観光課によれば「美濃の鵜飼いが歴史に登場するのは大宝2年（702年）」ということですから、その歴史の古さに驚かされます。

首立てて鵜のむれのぼる早瀬哉 　　釈浪化

鵜の群れが長い首を真っすぐに伸ばして急流を泳ぎのぼって行く。
……その精一っばいさが目に浮かぶようです。

芭蕉もまた、鶺鴒飼いを詠みました。あまりにも有名な句で、ここに挙げるのは、まさに蛇足と言うほかありませんが……

おもしろうてやがて悲しき鶺鴒舟哉　松尾芭蕉

せっかく水中へもぐりこんで獲物を捕らえて来たのに、人間によって横取りされてしまう。でも、また、真剣な顔つきで水中へ。

そんな鶺鴒がいじらしいやら、可哀そうやら……。

芭蕉と並び称される蕪村もまた、鶉飼いを詠みました。

朝風の吹きさましたる鶉河哉 与謝蕪村

朝早く、鶉飼いの河にやって来ると、前夜の熱狂を清涼な朝風が吹き冷ましたかのように、しんと静まり返っている。……

似たような光景は、お祭り騒ぎのあとにも。翌朝早く、その神社の界限に行くと、あれ、あの熱気と賑わいは一体どこへ消えたのだろう……と、まるで狐につままれたような気分になります。

芭蕉、蕪村と並び称される一茶もまた、鶉飼いを詠みました。

叱られて又這入る鶉のいぢらしや 小林一茶

鶉だって、時には失敗する。鶉匠はそれを叱る。すると「もう一度、行って来ませう」とばかり、再び水中へドブン。

「痩せ蛙……」の句に示されますように、一茶は力の弱い動物に愛情を寄せた人のようです。そんな一茶の目には、「叱られて」いる鶉がとても「いぢらしや」と映じたことでしょう。